第二節　災害

肱川町の災害記録は、昭和二四年以前のものはほとんどない。大洲藩主加藤家年譜によると、元禄元年（一六八八）より万延元年まで一七三年間の内出水の記録は六二年間もある。また、明治以降においても出水といわれる年は、二年半に一回もあり水害をこうむる事が多い。

その中では、文政九年（一八五四）五月　明治一九年（一八八六）九月　昭和一八年（一九四三）七月および昭和二〇年（一九四五）九月に起った洪水が大きいものである。

この水害史をたどると、一旦出水をみると市街地といわず、農村といわず一面の泥海と化し、家屋流失・同じく破壊・生産の損耗など損害は甚大であり、またこれが復旧に要する経費も莫大であった。

特に、昭和一八年においては大洲・喜多郡内いたるところが水害にみまわれ、山津波等による死者四六人、流失倒壊家屋は住家二三五戸・非住家四四三戸。半壊住家・非住家合せて三四五戸。床上浸水四、七一九戸。床下浸水二、九八四戸。耕地の浸水は田九一〇町歩、畑六四町歩におよび、他に道路・橋・堤防・鉄道の被害また大きく悲惨の限りであった。

当町では、昭和二〇年、鹿野川大橋に野村町から木橋が流れつき、逆流する水によって付近一帯は湖水となり鹿野川の町筋は軒下まで浸水、かなりの被害を受けている。その後も幾度となく洪水に脅かされ、その度に家財を整理し避難するありさまであった。

昭和三四年三月鹿野川ダムの完成後は、道路の決壊、崩壊等が水による災害の主なものとなり、人家及び田畑の受ける災害はほとんど皆無となるに至った。

一　大地の地すべり

肱川沿いの標高二〇〇㍍付近の山腹には所所に平坦地や、緩斜地が発達している。これは河岸段丘かあるいは古い山崩れによる崩土の堆積によって形成されており、

第17表　年次別災害一覧表

災害年	同西暦	月日	災害の原因内容
元禄　元年	一六八八	五・三〇	大雨　洪水
宝永　五年	一七〇八	五・　五	暴風雨　洪水
正徳　五年	一七一五	六・二一	暴風雨　洪水
享保　六年	一七二一	七・一六	暴風雨　洪水
寛保　二年	一七四二	八・二一	暴風雨　洪水
延享　元年	一七四四	八・一〇	風雨
寛延　元年	一七五一	九・　二	暴風雨　洪水
宝暦　七年	一七五七	七・二六	洪水
明和　二年	一七六五	八・　一	風雨
安永　二年	一七七三	五・二五	暴風雨　洪水
天明　七年	一七八七	四・二五	大雨　洪水
寛政　八年	一七九六	八・一一	大洪水
亨和　元年	一八〇一	八・一九	暴風　洪水
文化　元年	一八〇四	八・二九	暴風雨　洪水
文政　九年	一八二六	五・二一	暴風雨　洪水
天保　九年	一八三八	七・二一	大雨　洪水
弘化　三年	一八四六	六・二五	洪水
嘉永　五年	一八五二	八・二二	洪水
安政　二年	一八五五	七・一四	大雨　洪水
明治一九年	一八八六	九・一一	暴風雨　洪水
明治二九年	一八九六		不詳
明治三八年	一九〇五		不詳
明治四一年	一九〇八		不詳
明治四四年	一九一一		不詳

そこに部落や、耕地がひらかれている。そして、その崩土の堆積地が地すべり地となっていることが多い。

昭和三三年に、肱川沿いの肱川町大字山鳥坂地先に、洪水を調節するとともに、その貯水を利用して発電を行う治水利水兼用の多目的の鹿野川ダムが建設された。

鹿野川ダムの貯水池鹿野川湖の左岸には、山崩れによって形成された緩斜面が多数分布しており、多くは地すべり地形をなしている。

災害年	同西暦	月日	災害の原因内容
大正　元年	一九一二	九・二一～二二	台風　強風　洪水
大正　三年	一九一四	九・一四	台風　強風　洪水
大正　四年	一九一五	九・　八	台風　風雨　洪水
大正　七年	一九一八	七・一〇～一二	台風　大雨　洪水
昭和　九年	一九三四	九・二二	室戸台風　暴風雨　洪水
昭和一〇年	一九三五	六・二六～三〇	長雨
昭和一二年	一九三七	九・一一	台風
昭和一三年	一九三八	七・二七～八・二	豪雨　洪水
昭和一六年	一九四一	九・二八～一〇・一	台風
昭和一七年	一九四二	九・二一	台風
昭和一八年	一九四三	七・二四	台風　大洪水
昭和二〇年	一九四五	九・一八	枕崎台風　鹿野川大橋流失
昭和二一年	一九四六	一〇・一〇	阿久根台風
昭和二四年	一九四九	七・二九	台風九号
昭和二五年	一九五〇	一二・一二	南海道地震
昭和二六年	一九五一	六・一八～二一	デラ台風
昭和二七年	一九五二	九・一四	ギジア台風　水害二か所
昭和二八年	一九五三	一〇・一四	ルース台風　水害二か所
昭和二九年	一九五四	六・二三	ダイナ台風　水害一か所
昭和二九年	一九五四	六・三〇	水害三　風害一
昭和三〇年	一九五五	九・一三	一二号台風
昭和三一年	一九五六	九・二六	一五号台風）水害五　風害二
昭和三二年	一九五七	九・三〇	二二号台風
		九・二七	台風　水害二　風害一
		九・　七	一〇号台風

その一つ大地地区は、ダム地点より上流へ一・七㌔の肱川支流大谷川との合流点にあたる北向き斜面である。斜面は、傾斜によって三つの区域に分けられ、ダム築造後は水面がこの付近で約三六㍍上昇している。

地すべりは、ダム築造後に急斜面と緩斜面の境界付近より下方に起り、面積約一〇㌶の土地が大谷川あるいは肱川本流へすべり出したのである。

二　地すべりの経過

1　地すべり始まる

災害年	同西暦	月日	災害の原因内容
昭和三三年	一九五八	一二・一二	水害一　干害一
昭和三三年	一九五八	八・　九	大地地すべりの徴候表わる
昭和三四年	一九五九	九・二六	六号台風
昭和三五年	一九五九	八・二九	一五号伊勢湾台風　水害一
昭和三六年	一九六〇	九・一六	一六号台風
昭和三八年	一九六一	一～二月	一八号第二室戸台風
昭和三八年	一九六三	四～六月	一月豪雪　大地地すべり再び活発
昭和三八年	一九六三	八・八～一〇	長雨　農産物被害
昭和三九年	一九六四	六・二六	九号台風
昭和三九年	一九六四	九・二五	集中豪雨　農道決壊
昭和四〇年	一九六五	九・一〇	二〇号台風
昭和四〇年	一九六五	九・一六	二三号台風
昭和四一年	一九六六	七・　一	三四号台風　町道決壊
昭和四一年	一九六六	九・　九	集中豪雨　山留をした
昭和四一年	一九六六	九・一八	一九号台風
昭和四一年	一九六六	九・二八	二一号台風　町道決壊
昭和四二年	一九六七	七・　九	二四号台風
昭和四三年	一九六八	六～九月	集中豪雨　町道決壊
昭和四三年	一九六八	一月	干害　松山気象台始まって以来の異常干天
昭和四三年	一九六八	二月	町道崩壊
昭和四三年	一九六八	七・　二	異常積雪
昭和四三年	一九六八	八・　六	集中豪雨　路側決壊
昭和四三年	一九六八	九・二四	宇和島沖地震　肱中　予子林小被害
昭和四四年	一九六九	六・七～七・一〇	台風一六号　赤岩橋根固め
			梅雨前線による豪雨　町　農道決壊

昭和三三年一二月一二日
付替県道が延長約六〇㍍にわたり崩落
前後して大谷橋右岸の斜面約一〇㌶の地域に亀裂発生　その後亀裂は山腹の斜面にも生じ大谷橋は右岸橋台とともに左岸に向って移動しはじめる

昭和三四年二月一日
大谷橋の水平移動三二〇㍍に達す

昭和三四年三月―四月
小移動ふたたび促進され四戸の民家立退き迂回路の整備　舟航によって交通確保

災害年	同西暦	月日	災害の原因内容
昭和四四年	一九六九	八～一一月	干害
昭和四五年	一九七〇	四～六月	長雨及び異常気象　路側決壊
昭和四五年	一九七〇	六・一四～七・六	梅雨前線豪雨並に台風二号
昭和四五年	一九七〇	八・一五～二一	台風九号並に台風一〇号　路側決壊
昭和四六年	一九七一	八・六	台風一九号　山際　路側決壊
昭和四七年	一九七二	六・六～七・二五	梅雨前線豪雨　山際　路側決壊
昭和四七年	一九七二	九・九～一八	秋雨前線豪雨（含一〇号台風）
昭和四八年	一九七三	五・七～八	豪雨　路側決壊
昭和四八年	一九七三	六・二六～二七	大雨
昭和四九年	一九七四	八・一五	台風一〇号　路側決壊
昭和四九年	一九七四	七・六	台風八号
昭和四九年	一九七四	九・一	台風一六号
昭和五〇年	一九七五	九・九	台風一八号
		八・一七	台風五号　暴風雨

（明治四四年までは加藤家年譜　以下愛媛の災害概況と町役場の資料から取材）

2　地すべり一時停止

昭和三四年五月以降

地すべり活動停止　大谷橋橋台の基礎固定とともに道路復旧工事

昭和三五年以降

大した移動なく小康を保つ

豪雪に見まわれ　三月にふたたび移動活発

昭和三八年三月―六月

連続した降雨のため移動さらに大となる　大谷橋右岸山腹から道路への落石が民家に飛込むなど被害大

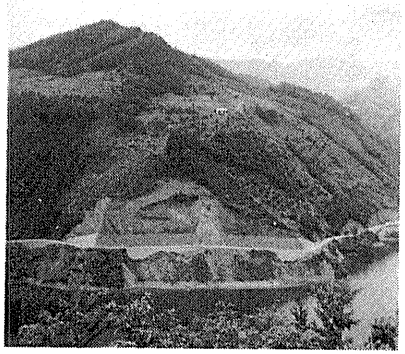
数戸の家屋立退　六月には二万平方㍍に及ぶ崩壊おこる　交通途絶　その後も山腹の崩壊　路側の決壊相次ぎ道路は寸断される

3　地すべり再びはじまる

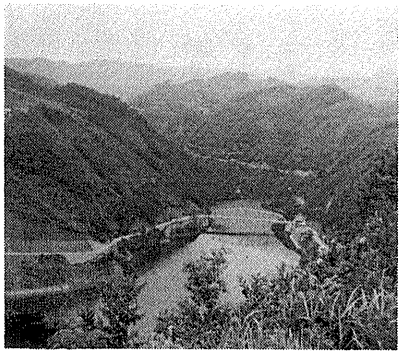
昭和三七年六月―七月

降続いた雨によりふたたび移動開始大谷橋橋台に亀裂を生じ山腹が崩壊した　昭和三四年に発生した山腹上部の亀裂との段落差大となる　交通途絶

昭和三七年一二月―同三八年一月



第36図　地すべり地　大地



第37図　地すべり地　大谷橋付近

4　復旧工事完成

昭和三八年

町村道の改良整備により大型自動車交通可能　引続き計画に基き復旧工事施工

総額五億六千万円にのぼる災害復旧工事を実施する為に年度別工区の設定　分割施工方式の検討をする

種種の問題にみまわれながら　多くの苦難と貴重なる体験を経て　五年の歳月をついやし　昭和四一年度末をもって全工事を完了することができた　その後平穏

全国地すべり対策協議会「大地地すべり」より抜粋

崖（がけ）くずれ

地すべり地帯になっている当地方では、長雨が続いたり、或は集中的に降れば、山くずれ、崖くずれ等の心配をしなくてはならない。

戦後の大きなものには、下敷水かばつの崖くずれがある。これは昭和二六年のことで崖くずれは県道上に山を作り、河辺川の対岸下嵯峨谷近くまで土砂を押しだした。唯一の交通路であった河辺村への県道は、ブルドーザーのない時代であった、三か月間交通が杜絶（とぜつ）した。後には、地ならしをして宅地とし集落ができあがった。

今一つは久下（くげ）の崖くずれである。約百㍍の高さの湖岸の崖がくずれ落ちた。昭和四一年のことであった。復旧には半年以上を要した。道路（現在は国道）が切断され渡舟によって湖上をよぎり連絡するより方法がなく、車は予子林・坂石を通る県道を迂（う）回しなければならなかった。幸、両災害ともに住民・住家の損傷はなかった。